ヨハネ七・49における「群衆」
――古シリア語訳を手がかりとして――[1]

新　免　　貢

キーワード：群衆，アム・ハ・アレツ，民草，シリア人教会，古シリア語訳

はじめに――新たな「群衆」像を求めて――

R. ブルトマン，C. K. バレット，R. ブラウンらの定評のある大部な学的注解書はいずれも，ヨハ七・49――「しかし，律法を知らないこの群衆は呪われている」――をタンナイーム期ラビ文献中の文言（「教養のない者は罪を恐れず，また，アム・ハ・アレツは敬虔ではない（חטא ולא עם הארץ חסיד אין בור ירא）」（*Aboth* 二・5）[2] と関係づけ，「群衆」（オクロス）を「アム・ハ・アレツ」（地の民）と同一視する[3]。R. ブラウンは，実際のところ多くのファリサイ派はその種の憎悪を当然共有していなかったであろうと仮定するが[4]，その仮定は，当時のユダヤ社会における両者の現実の緊張関係を正しく観察しているとは言い難い。

「アム・ハ・アレツ（'am ha' arets）」と学者（talmide ḥakamim）との間にある憎悪は克服し難いほどの溝があったことを示すラビ資料の言及例は，上述の *Aboth* 二・5 以外にも残されている。たとえば，『ペサヒーム』四十九 b[5] によれば，ラビ・アキバはかつて自分が「アム・ハ・アレツ」であった頃をふり返り，ろばのように後者を骨までかみ砕いてやろうという激しい

憎悪を抱いたことを弟子たちに述べ，また，ラビ・メイルは「アム・ハ・アレツ」に娘を嫁がせることはライオンの餌食として娘を差し出すようなものであると教えたと言われている。「アム・ハ・アレツ」は社会的に有害な存在として動物同然に扱われるべきであると考えられていた。他方,「アム・ハ・アレツ」が学者たちに対して抱く憎悪は，世界の諸々の人々がユダヤ民族に対して抱く憎悪を上回ると述べられている。

確かに，ユダヤ教最高の律法学者ラビ・アキバ（紀元後二世紀）のようにアム・ハ・アレツから学者になった事例もあり，両者の間にある溝は必ずしも越えがたいものではなかったかもしれない[6]。さらに，エルサレム滅亡（紀元後七十年）後，ファリサイ派がユダヤ思想を形成し，その流れを汲むラビ・ユダヤ教がユダヤ人支配を継続したと『ルター訳聖書』付録の用語解[7]などでは規範的に説明されてきたが，ラビの権威がユダヤ人全体においてどこまで絶大なものであったかは不明であり，ユダヤ教信仰の守り方も実際は一様でなかったと想像される[8]。

これらのことに加えて,「アム・ハ・アレツ」の単語としての意味は，旧約聖書においては，文脈によって異なることが指摘されねばならない。すなわち,「アム・ハ・アレツ」がイスラエル人（王下十六・15他），異邦の民（王上八・43他），出自がユダヤ人ではない者たち（エス八・17），帰還民を脅かすパレスチナ内，及び，周辺の地元住民（エズ十・2他），工作員（王下二十一・24他）などを指す用例もある。捕囚後，周辺諸民族との雑婚はユダヤ人としての固有の特徴の喪失をもたらした。その後，ユダヤ民族再興に貢献したエズラとネヘミヤは,諸々の地の民（アンメー・ハ・アラーツォート）との雑婚を禁止した（エズ九・1他）。律法を奉じない人々からの分離により，あらゆる汚れから自分自身を引き離す分離主義派（ペルシーム）に遡るファリサイ派は，清めや捧げ物に関する律法の諸規定を守ろうとしないアム・ハ・アレツとのいかなる接触をも汚れとして忌避した[9]。ヨハ七・49の背景に関

する考察には，こういう前史があることをふまえなければならない。

これらのことを勘案して，当該箇所における「群衆」の特徴をより具体的に浮かび上がらせるためには，上記注解書の規範的説明，ラビ資料や旧約聖書における言及例だけではなく，シリア語で「分離福音書」（ewangelion da-mepharreshe）と呼びならわされる古シリア語訳（Vetus Syra）の独特の読みにも留意する必要がある。ギリシア語テクストに基づく古シリア語訳原本は失われて現存しないが，その本文型を代表する写本が二つ残存している。世界中の研究者たちによって使用されているネストレ＝アーラント編『ギリシア語新約聖書（第二十八版）』（以下，ネストレ版）の標準的ギリシア語テクスト（注35）とは異なる当該箇所のシリア語訳テクストの独特の読みは，「群衆」に関して解釈上の有益な示唆を提供している。

そのことに注目した本稿は，シリア語テクストの背後に想定され得るアラム語やヘブライ語との関係にも言及しながら，ギリシア語テクストからだけでは浮かび上がってこない新たな「群衆」像を引き出すことを目的としている。その課題を遂行することにより，福音書テクスト分析においては，生きた伝承としての古シリア語訳の文献学的価値が今なお失われていないことが明らかになろう。また，そのような論じ方を通して，シリア人キリスト教の歴史的価値も再認識されるであろう。本稿は基本的には，初期キリスト教の思想的多様性を異なる考え方のせめぎ合いとして長年追求してきた筆者の問題意識に動機づけられているが，それと同時に，従来の規範的聖書学の範囲内では十分には扱われてこなかったと思われる領域の中に一歩踏み込んでいると筆者は考えている。

1．各シリア語写本の比較

タティアノス『ディアテッサローン』のシリア語テクストは失われて現存しない。復元の手がかりは，主として四世紀シリアの聖書解釈学者エフライ

ムの福音書注解であるが，ラテン語訳版[10]やドイツ語訳版[11]の各巻末の聖書箇所索引においてはヨハ七・49は挙げられていない。実際，F. C. バーキットが論証しているように，エフライムの真正の著作にもヨハ七・49は挙げられていない（注81に言及されているF. C. バーキットの研究参照）。

われわれの分析は，A. キラーズ編『シリア語写本テクスト比較表　第四巻：ヨハネ福音書』[12]における当該箇所のシリア語訳テクストと，ネストレ版ギリシア語テクスト――ヨハネ福音書は七十～八十年代成立と想定される[13]――とを出発点とする。以下に掲げるこれらのテクストのローマ字表記において，Sはシナイ重記写本（四世紀末または五世紀初期），Cはキュアトン写本（五世紀），Pはペシッタ（五世紀初期），Hはハルクレアン写本（七世紀），Gはギリシア語テクストをそれぞれ表示している[14]。なお，×はテクストの欠損箇所を示す。

S：	’elā	’en	×	qṭnā	×	’aynā	dlā	yāda‘	’orāyṭā	×	×
C：	’elā	’en	×	quṭnā	×	’aynā	dlā	yāda‘	’orāyṭā	dlīṭīn	’enun
P：	’elā	’en	×	‘amā	hānā	×	dlā	yāda‘	nāmosā	līṭīn	’enun
H：	’elā	×		kenšā	×	ho	dlā	yāda‘	nāmosā	līṭā	’ytyhon
G：	alla			ho ochlos houtos			ho mē ginōskōn ton nomon			eparatoi eisin	

「しかし」,「群衆」,「知らない」,「律法」,「呪われている」といった語順は，Gの語順――「しかし」,「この群衆」,「知らない」,「律法」,「呪われている」――と基本的に一致していることは明らかである。この語順の一致は，一部欠損箇所があるにせよ，シリア語訳テクストがギリシア語テクストを前提にしていること示している。なお，研究者の便宜を考慮して，『シリア語写本テクスト比較表』においては，Pのテクストにのみ母音符号が付されているが，本稿では，S，C，Hの各テクストにも母音符号を付けることを試みた

ことをことわっておく。

これらのテクストにおいて使用されている各単語を概観すると，いくつか重要な点が確認される。最初に，ギリシア語の浸透とアラム語法がわれわれのテクスト全体に反映されていることが指摘されねばならない。「律法」に相当する語は，PやHでは，「律法（nomos）」を意味するギリシア語からの借用語 nāmosā が使用されているのに対して，SやCでは，「契約」を指すパレスチナのユダヤ教アラム語 ʾōrāyᵉytā[15] に由来する ʾorāyṯā[16]——「モーセ律法」（Pentateuch）——が使用されている。

C，P，Hにおける「呪われている」は，ユダヤのバビロニア・アラム語の単語 lyyṭ̮ に由来する[17]。ただし，「呪われている」に相当する語は，Sには欠けている。これを興味深い省略である。これに関して，Sをカタリナ修道院で発見したアグネス・スミス・ルイスは，ファリサイ派はここで呪いを念じているのではなく，イエスに対する人々の信仰が律法に対する無知に起因していると述べられているにすぎないと指摘する[18]。しかし，そういう理解に立てば，ファリサイ派とイエスとの対立関係，及び，イエスを支持する群衆とファリサイ派との対立関係を描いているヨハネ福音書全体の記述からずれてしまうであろう。「呪われている」に相当する語が欠如していても，この対立関係は前提とされていると解するのが穏当と思われる。これに加えて，Pの当該箇所のアラム語訳テクストは，ʿām の強調形 ʿammā を使用し，ヘブライ語訳テクストは，「群衆」を強調して hehāmōn ʿām hazzeh（＝この群衆）と訳している[19]。こういう表現法により，「律法を知らない群衆」に対するファリサイ派側の蔑視の感情を反映させている。

kenšā の動詞形 knaš（＝集める）は，アラム語動詞 kᵉnaš，ヘブライ語動詞 kānas に相当する。

各シリア語訳テクストの条件節における冒頭の語（S，C，Pでは ʾelā ʾen，Hでは ʾelā のみ）は，前後の文脈上の意味——「律法をわきまえない

この群衆がイエスを信じているとして，だからどうだと言うのか，呪われよ」[20]などといったファリサイ派の苛立ちと欲求不満[21]，及び，律法規定に無頓着な「アム・ハ・アレツ」との関係断絶[22]――を効果的に言い表している。つまり，この alla 以下の文は，すでに片が付いていることにさらに検討を加えて[23]，ダメ押しをしているように響く。S，C，P における ’elā（＝…でない限り）と ’en（＝もし…ならば）との組み合わせはギリシア語の ei mē（＝…でない限り）に相当するが，それ自体は四世紀シリアの神学者アフラハトの説教テクスト（十・18 他）にもシリア教会公認聖書ペシッタの新約聖書の福音書テクスト（マタ十一・27. ルカ十八・19）にも証拠例がある[24]。

2. S の ܩܛܢܐ（qṭnā），C の ܩܘܛܢܐ（quṭnā）

当該箇所の「群衆」（ochlos）に対して, P では ܥܡܐ（‘amā）――「民」（ルカ一･17 他),「異邦人」(マタ六･32 他)[25]――, P よりも古い S では ܩܛܢܐ(qṭnā)――「取るに足らない」,「小ささ」などを含意――，C では ܩܘܛܢܐ（quṭnā）――「群衆」,「民衆」,「庶民」――, H では ܟܢܫܐ（kenšā）が使用されている。この kenšā は,「集まり」,「人の群れ」（創二十八・3),「議会」（言行二十三・1),「大勢」,「（修道士の）集まり，一行」,「非常に多くの人びと」,「人の群れ」などを意味する[26]。

上記シリア語訳テクストの中で特に目を引くのは，S の ܩܛܢܐ（qṭnā）と C の ܩܘܛܢܐ（quṭnā）である。「民衆」を指す qṭnā は, 古文書学者カスパー･ルネ･グレゴリー（ライプチヒ大学新約学教授）によって突き止められた読みである[27]。この語に関しては，学者・専門家階級からほど遠いところに位置し，指導者たちや王たちとは対照的立場にある「群衆」のイメージを浮かび上がらせる用例が確認されている[28]。qṭnā は,「貧弱にする，取るに足らないものにする」を意味する動詞 qṭan の能動態分詞の強調形である[29]。両語とも，パレスチナのユダヤ教アラム語 קטן（qṭn）の派生語である[30]。同じ קטן を語

根とするヘブライ語動詞（qāṭōn）は「取るに足らない」（創三十二・11 他），形容詞（qāṭān）は「小さい」（エレ六・13 他）などを意味する[31]。

これらのことは，西アジア一帯に広範囲にわたって千年以上も続いたアラム語が生きた言語としてその息吹を当該伝承に反映させていること[32]，当該伝承がヘブライ語の影響も受けていることを示唆している。つまり，アラム語やヘブライ語の影響下で初期キリスト教徒たちの間で当該伝承が生き生きと記憶されていったと想定される。実際，アラム語の単語がイエスの口に数々上っていることも再確認されるべきである[33]。

こうした言語上の事情は，ヨハ七・49 のシリア語訳テクストの分析においても考慮されるべきである。確かに，ギリシア語テクストからシリア語への忠実な翻訳には語彙や文法の面で限界があることを S. P. ブロック（アラム語・シリア語講師，オックスフォード大学ウルフソンカレッジ）は具体例を挙げながら指摘している[34]。しかし，ギリシア語表現に逐語的に対応していないからと言って，シリア語訳の限界を指摘するのは奇妙であると言わなければならない。というのは，S. P. ブロック自身が認めているように，シリア語はそもそも，ギリシア語とは異なる言語グループに属しているからである。また，シリア語テクストでは，写本によって読みにばらつきがあるものの，これをシリア語テクストの信用性を疑わせると否定的に考えるのではなく，異なる読みを生み出すシリア語の語彙の豊かさと解すべきであろう。しかも，S. P. ブロックの指摘は，S の ܩܛܢܐ（qṭnā）と C の ܩܘܛܢܐ（quṭnā）といった訳例には特に当てはまらないと考えられる。これらの独特の読みは，他には例がなく，思いつきとは考えられない。そこには，シリア語文化圏の人びとのイエス体験と信仰生活の実践に根差した洞察が込められており，そこにある一定の思想水準の高さが窺えるからである。

なお，古シリア語訳の読みが，解釈上の手がかりだけではなく，歴史的な情報を忠実かつ細やかに伝えていると思われる箇所もあることも付言してお

かなければならない。その一例として，ヨハ六・71 における「イスカリオテ人シモンの子ユダ」という表現が挙げられる。H の欄外の読みでは，apo Karuōtou（＝カリオテ出身の）と記されており，イエスを裏切った弟子ユダの素性を死海東岸のカリオテ出身者シモンの子として説明し，想像力をかき立ててくれる。そこから，イエスのことを伝え聞いて，イエスの側近弟子集団とは違って，途中からイエス運動に参加したユダの姿が若干思い浮かんでくる[35]。S，C，P よりは後代に成立した H が説明的文言を加えていることは明かである。H は，S，C，P と切り離して考えるべきではなく，互いに古シリア語訳の伝承を構成していると考えるべきである。

3. シリア語への福音書翻訳

「教会史の父」と称せられるカイサリアのギリシア教父エウセビオス（260 頃–339 年）は，主著『教会史』（323 年）Ⅳ・二十二・8 によれば，「ヘブライ人による福音書のようなもの」に関する情報をユダヤ人キリスト者ヘゲシッポス（？–180 年）からすでに得ていた。エウセビオスは，ヘゲシッポスについて次のように述べている。

> ἔκ τε τοῦ καθ᾽ Ἑβραίους εὐαγγελίου καὶ τοῦ Συριακοῦ καὶ ἰδίως ἐκ τῆς Ἑβραΐδος διαλέκτου τινὰ τίθησιν, ἐμφαίνων ἐξ Ἑβραίων ἑαυτὸν πεπιστευκέναι, καὶ ἄλλα δὲ ὡς ἐξ Ἰουδαϊκῆς ἀγράφου παραδόσεως μνημονεύει.[36]

直訳すれば，「ヘブライ人による福音書とシリア語文書とから，特にヘブライ語の方言から種々のことを文書に書き記して，ヘブライ人出自の自分自身が信仰心を持ったことを明らかにし，さらに，他の種々の事柄についてはユダヤ人の口伝に由来するものとして言及している」[37] となる。秦剛平は「シ

リア語の福音書」の可能性を示唆している[38]。しかし，彼自身が認めているように[39]，この「シリア語文書」[40]が何を指しているかは実際不明であると言わなければならない。

また，“ἔκ τε τοῦ καθ᾽ Ἑβραίους εὐαγγελίου καὶ τοῦ Συριακοῦ” に対する「ヘブライ人によるシリア語福音書」という訳表現[41]は若干無理があろう。というのは，“te…kai…” は，文法上，「…と…との両方」を意味しているからである。ここでは, やはり「ヘブライ人による福音書」と「シリア語（の文書)」の両方が言及されていると解せられる。エウセビオスのこの記述は，二世紀におけるシリアにおける多言語状況と文芸的環境を反映している点で，貴重な証言である。シリア語への福音書の原本は残存していないが，その翻訳作業は早くも二世紀にさかのぼると考えられる[42]。

それゆえ，古シリア語訳は異なる訳を排除する目的で作成された P[43]――「ペシッタ」はシリア語で「簡素」の意――よりも古いことになる。これに加えて，ナグ・ハマディ文書（1945 年発見）に収められている四世紀後半筆写のイエス語録集『トマス福音書』の存在にも注目しなければならない。同福音書との並行箇所を含む三世紀筆写のオクシリンコス・パピルス一，六五四, 六五五がシリア語原本からの複数のギリシア語訳に遡るとすれば，同福音書は二世紀後半には成立していた可能性がある[44]。福音書のシリア語訳テクストもまた，こういう文書を生み出したエデッサの豊かな文芸的環境から見て, その文献的価値は高い。今日のトルコのウルファに位置するエデッサは，遅くとも二世紀にはキリスト教が伝わり，当時の文化の中心として栄えた[45]。狭義のシリア語は，中央シリアのアラム語方言やパレスチナのアラム方言よりもチグリス川地域のアラム方言に近いエデッサ方言とも言われる[46]。これらのことは，広い文化圏の中から生み出されたシリア語訳テクストの古さを感じさせてくれる。シリアの神学者バルダイサンの著作（『諸国諸法の書』）によると，キリスト教は三世紀初頭には，現在のアフガニスタ

ン北東部にまで伝わり，そこでの人たちは外国人との接触を持たなかったと言われている[47]。

しかし，この「古さ」をイエスが用いたとされるアラム語[48]と単純に結びつけるべきではない。シリア語がイエスの用いた言語であると言われる場合もあるが，これは，シリア語がアラム語と同系統であるという意味でしかない。厳密に言えば，シリア語は，バビロニア・タルムードのアラム語やマンダ語などと共に，東方アラム語方言に属している。仮説上イエスの言語とされるパレスチナのアラム語は，西方アラム語方言に属しており，死海文書の一部がそれによって書かれている。ヘブライ語は, セム語族――アラビア語, エチオピア語，アッカド語など――の範囲内におけるアラム語の姉妹言語であり，通常，北西セム語に属しているとされる[49]。

4．「群衆（ochlos）」

「群衆」を意味する ochlos は，新約聖書において 175 回，四福音書だけで 149 回使用され, その中, マタイでは 50 回, マルコでは 38 回, ルカでは 41 回, ヨハネでは 20 回とされる[50]。A. シュモラー編『ギリシア語新約聖書コンコルダンス』[51] において挙示されている同語の言及箇所を A. キラーズ編『シリア語写本テクスト比較表』（参考文献「聖書本文」の第二番目）のそれと突き合わせてみると，ochlos に対して，ܟܢܫܐ（kenšā）の使用例が大多数であるのに対して，それ以外の語――’anāšā や ‘amā――の使用例は稀であることがわかる。しかし，その稀な使用例においてさえ，ochlos に適用された S, C，P，H のシリア語の単語が完全に一致しているわけではない。

たとえば，身の危険を察知して去っていくイエスについていく ochloi――ochlos の複数形――[52] に対して，マタ十二・15S・C[53] では ’anāšā，同 P・H では kenšā がそれぞれ使用されている[54]。また，ガリラヤ・ペレアの領主ヘロデ・アンティパス（紀元前 4–後 39 年）は，兄弟フィリポとの結婚の件

を律法違犯として批判した洗礼者ヨハネの殺害を狙っていたが，ヨハネを預言者と認めていたochlosを恐れていた。そのochlosに対して，同十四・5S・C・Pでは‘amā，同Hではkenšāがそれぞれ使用されている[55]。

また，弟子たちと共に十字架の道行きの指示を受けるochlosに対して，マコ八·34S·P·Hでは，kenšāと‘amāとの組み合わせ——直訳すれば，「人々の集まり」——が使用されている[56]。この読みは，呼び寄せられた名もなきochlos集団が弟子集団と対等の関係にあることを効果的に浮かび上がらせているように思われる。

シリア語写本の読みが一致しない場合も認められる。弟子たちを取り囲んでいたochlosがイエスを見つけると，イエスのところに一緒に駆け寄ってきて挨拶した。その中の一人の者が，自分の息子に憑りついた聾唖の霊を弟子たちが追放できなかったことをイエスに告げると，律法学者たちも含む衆人環視の下でイエスは聾唖の霊を追放した。そのような緊迫した場面で，大勢のochlosに対して，マコ九・25Sは’anāšā，同Pは‘amā，同Hはkenšāをそれぞれ採用しており，三者三様である[57]。

イエスの教えに驚嘆していたochlosに対して——イエス逮捕と殺害の機をうかがっていたユダヤ当局は彼らを恐れていた——，マコ十一・18S・Pと同十二・12S・Pでは，‘amā——ただし，両箇所Hではkenšā——が採用されている[58]。

「ヨハネの洗礼は天からであったか，人間からか」というイエスの問いに対する答えに窮したユダヤ教指導層が恐れていたochlosに対して，マコ十一・32S・P・Hは‘amāを採用している[59]。

ユダヤ教当局から駆り出されたochlosに対して，マコ十四・43Pでは，‘amā，同S・Hではkenšāがそれぞれ用いられている[60]。

イエスの十字架に付けるためにユダヤ教当局に扇動されたochlosに対して，マコ十五・11Sと同十五・15Hでは，‘amā，前者P・Hと後者S・P

では kenšā がそれぞれ用いられている[61]。

屋根から吊りおろされる中風の男を癒す業を目の当たりにした ochlos に対して，ルカ五・19S・P では ‘amā，同 H では kenšā がそれぞれ用いられている[62]。

安息日にも救済の手を差し伸べるイエスの業を見て喜ぶ ochlos に対して，ルカ十三・17S・C・P では，‘amā，同 H では kenšā がそれぞれ用いられている[63]。

イエスについていろいろな噂を立てる ochlos に対して，ヨハ七･12aS･P･H では kenšā，同 C では ‘amā がそれぞれ使用されている。イエスに惑わされているとされる ochlos に対して，ヨハ七・12bS・C・P では ‘amā，同 H では kenšā がそれぞれ採用されている[64]。

永遠の命に関するイエスの発言をそばで立って聞いて「雷鳴」と感じたり，天使との語らいの声のように聞こえたという ochlos に対して，ヨハ十二・29S では ’anāšā，同 P・H では kenšā がそれぞれ採用されている[65]。

以上，検討してきたように，ochlos に対して ܟܢܫܐ（kenšā）の使用例が大多数であるにせよ，ochlos に当てられている古シリア語テクストの単語は各写本において必ずしも同一ではない。ochlos に対して，古シリア語テクストでは写本によって異なる語が当てられているという事実をここで再確認しておく必要がある。そこにシリア語文化圏における豊かな表象群の一端が垣間見られる。異なる時期に異なる表象が異なる訳者たちによって採用されていることは，シリア語文化圏内で絶え間なく続いた創造的な文芸的営みの粘り強さを示唆しているとも言えよう。さらに，付け加えると，P ではギリシア語の “ὄχλος” に対して，kenšā が用いられるのが通例であるが，パレスチナ・シリア語訳では，それが，そのまま ’oklōs（複数形は ’oklōsē’）と転写されている例が約 60 例あると言われている[66]。このことは，シリア語翻訳者がギリシア語の知識を十分に持っていなかったとも言えないことを証拠づ

けている。

写本の読みの不一致と微妙なばらつきは，否定的に評価すべきではない。特に，ochlos に対して，ܩܛܢܐ（qṭnā）やܩܘܛܢܐ（quṭnā）が適用されている例は本箇所のシリア語訳テクスト S・C 以外に見出されない。ochlos に対するシリア語相当語のいずれにも合致しない写本の読みが存在する事実は注目に値する。それにもかかわらず，ネストレ版のアパーラートゥス[67] には，本箇所におけるシリア語訳の異なる独自の読みは提示されていない。ギリシア語テクスト，及び，その異読，語順や句読点の違いなどを提示した規範的なアパーラートゥスだけでは，伝承の変容は十分には見えてこないという限界を認識する必要があろう。

「群衆」を指す S と C の読み――ܩܛܢܐ（qṭnā）や ܩܘܛܢܐ（quṭnā）――は，本稿の第二項目において論じたように，社会的に「取るに足らない」,「小さい」を含意する。それゆえ，P や H の読みと比較すると，S と C の読みは，「律法を知らない」とされる「群衆」の特徴を社会的に何の影響力もない卑賤の身――「取るに足らない存在」,「小さな存在」――としてより鮮明に言い表している。

R. ブラウンが言及しているように[68]，ヨハ七・49 は，預言者エレミヤが生きた六世紀において顕在化した問題に関する言及――「彼らはただ貧乏で，愚かな人たちであるだけで，ヤハウェの道，神の掟を知らない」（エレ五･4）――を想起させる。しかし，両箇所には，「律法を知らない者たち」に対する視線が根本的に異なる。預言者エレミヤは，巷を行き廻って出会った社会下層の人たちが，学校で知識を身に着けた身分の高い人たちとは違って，律法を教えられていないことを知り，彼らに同情する。それに対して[69]，本箇所では，律法学者たちは，「律法を知らない」とされる「アム・ハ・アレツ」を同情の余地のない者たちとして弾劾している。このような弾劾調の表現法は，教育を受けた宗教指導層側の「群衆」に対する蔑視の度合いを強め，初

期キリスト最大の教父アウグスティヌス（紀元後354-430年）が鋭く洞察しているように，ひいてはその蔑視がイエスにも向けられていることを効果的に暗示している[70]。

ヨハ七・49において，「群衆」が単なる「群衆」ではなく，「取るに足らない存在」，「小さな存在」と言い表されていることは，元のギリシア語本文の含蓄をSとCの読みが引き出し，「群衆」の姿を新たに解釈したことを示している。翻訳または書写に伴うこの解釈的変更は，足元に押し寄せる「群衆」を相手に濃密に交流したイエスと，その教えになびいていく「群衆」との一体性を効果的に浮き彫りにしている。

大胆な言い方をすれば，イエスと名もなき「群衆」との一体性は，現代キリスト教の宣教活動の現場においても共有されているイエス理解，及び，近代世界がその精力を注ぎ込んできた史的イエス探求――「人間の精神史における輝かしい一章」[71]――から生み出された知見の一つの到達点[72]を先取りしているとも言えよう。

言葉の伝承は，担い手を前提とする。伝承を担うことは，解釈を伴う。そういう仕方で，伝承は生きたもの，すなわち，干からびたものではなく，ナマモノとなる。伝承はまた変容する。それは何ら不思議ではないであろう。「伝承者でもあり書写者でもある者たち（die Tradenten und Abschreiber）」は，自分たちが生きている時代――自分たちにとっての「現在」――に対応した文言を種々付加していく[73]。その文芸的プロセスは，旧約聖書の預言者たちの編集された言葉のみならず，福音書テクストにも当てはまる。それと同時に，書き記された文字には，伝承者の担い手たち，翻訳者あるいは書写者の背景にある人々の声も見えざるテクストとしてモザイクのように織り込まれていくのである[74]。

これに加えて，福音書テクストを含む古代テクスト群は，断片的ゆえにすべての事柄を必ずしも詳らかに述べているわけではない[75]。われわれは，そ

のような資料上の制約と不備を免れない古代資料を通して，すべてを知ることが出来るわけではないのである。そういう限界の範囲内にとどまって思考停止するのではなく，その限界の範囲をわずかでも広げていくためには，目の前にあるテクストに見出されるたった一つの単語にさえ込められている意味の広がり，及び，その背後にある文芸的環境と生活状況などを綿密に分析する作業に従事するしかない。

5. A. ヴェーブスのシリア語訳福音書テクスト研究[76]

いずれにせよ，アラム語的な要素が色濃く見出される本箇所のシリア語訳テクスト S・C はギリシア語テクストの単なる逐語訳ではない。学者間では夙に認識されてきたように[77]，P 以前のシリアでは，アラム語方言の影響が根強く残り，福音書伝承の翻訳にも反映されていることは否定できない。また，最近はこの方面での研究が進展した結果，紀元後一世紀における多言語社会のパレスチナにおいてアラム語が日常語として使用されていたことが多くの碑文からも確認されている[78]。

村岡論文（「シリア教会」）において引用されているように[79]，シリア語研究の権威 T. ネルデケは，シリア語文法書において，C や S のシリア語テクストがセム語的なギリシア語原本よりも全体として流暢な文体でうまく書けており，P よりも独特の言語の特徴を示していると指摘している[80]。この観点は，ギリシア語本文に偏らない分析と考察のためにも留意すべきであろう。

福音書のシリア語訳研究の領域で重要な業績を残した学者の一人が，エストニア出身の A. ヴェーブス（タルトゥ大学）である。A. ヴェーブスは第二世界大戦の戦乱の最中，貴重な研究資料を失い，祖国を離れることを余儀なくされたが，その後，ベルリン，ボン，ゲッチンゲン，パリ，ケンブリッジなどの各地図書館において研究を続け，最終的にはアメリカにたどり着いた。A. ヴェーブスは，イエス自身の口から出て，弟子集団内で繰り返し告げら

れた言い回しとシリア語との密接な類似性に新約聖書のシリア語研究の絶大な意義を見出す。A. ヴェーブスのシリア語テクストへのこだわりには，並々ならぬものが感じられる。A. ヴェーブスのシリア語訳福音書テクスト研究は，P の優位を主張すると共に，『ディアテッサローン』をエフライムの聖書引用の典拠とする F. C. バーキット[81] に対して，S と C に代表される分離福音書の古シリア語訳の本文型が P 以前のエデッサにおいて広く読まれ，その後も絶えることなく粘り強く伝承され，読まれ続けたと主張する。

さらに，注目すべきことに，A. ヴェーブスはエチオピア語訳にも古シリア語訳テクストの影響の痕跡が認められることを指摘している。それによると，天の軍勢が現れて，天使と一緒に神をたたえた歌を記しているルカ二・14 前半部のギリシア語訳テクストは「いと高き所に神に栄光」と訳されるが，エチオピア語訳では「天には神に栄光」と訳されている。「天には神に栄光」という読みは『ディアテッサローン』に属しており，古シリア語訳テクストの伝承に保存されている。実際，二世紀成立の『ディアテッサローン』よりも後代に属する四世紀のアフラハトは，「天には神に栄光」という言い回しを引用している。それと同じ読み――たとえば，“lo un ere si gott in den himeln”――が，『福音書調和』のドイツ語テクストを用いた古文体のドイツ語説教にも見出される[82]。

現在，日本のカトリック教会のミサ典礼で歌われる賛歌にも「天には神に栄光」と全く同じ文言が見出される。これはグレゴリア聖歌の原曲[83] の旋律を生かし，日本語の抑揚とリズムを考慮した偶然の一致の結果であると考えられるが[84]，現象としては興味深いと言えよう。

このルカ二・14 後半部に関しては，注目すべきシリア語テクストの異読が存在する。「地には，平和が，み心にかなう人々に」は，P（ペシッタ訳）では，‘al ’ar‘ā shlāmā wsabrā ṭābā libnināshā――「地に，平和と良き希望，人の子らに」――と記されている[85]。そこには，「嘉納」を意味するギリシ

ア語テクストの eudokia に相当する語は見当たらない。「希望」を意味する sabrā の派生語 sbartā は，「知らせ」や「福音」をも意味する[86]。近代本文批評学の原則的手続きに従えば，ルカのセム語的特徴を考慮に入れて，属格形 eudokias が支持されるが[87]，P の読みには一定の神学的主張が込められている可能性があると考えられるので，これを一方的に排除すべきではない。東シリア神学の最高峰とされるモプスエスティアのテオドロス（紀元後 350 頃–428 年）は，eudokia を神の喜悦に基づく神の意志と定義した[88]。それは，神から人間へ向けられている点において神人協働的な意味合いを含んでいると解せられよう。他方，S（シナイ重記写本）では，P の読み「地に平和と良き希望」（ʿal ʾarʿā shlāmā wsabrā）が「地に平和と和解」（shlmā bʾarʿā wʾarʿwtā）と記されている[89]。これらの異読にも伝承の解釈が反映され，意味合いの広がりと豊かさが感じられる。近代本文批評学の原則は，テクスト間の相違を取捨選択して，より原型に近い読みに接近しようとする。この原則はテクスト分析の技術的方法（テクノロジー）として基本的に有用ではありつつ，誰もわかりようのないオリジナルを創作することにもなりかねない。学者たちが考案したテクノロジーによって，今度は学者たち自身がそのテクノロジーによって取り込まれていく。これもまた，近代の姿の一側面であろう。

ルカ二・14 後半部の読みについては，A. ヴェーブスは上述の研究書において言及していないようである。これは A. ヴェーブスが見落としたというよりも，恐らく，戦乱の中，資料散逸と各地を転々としながらの研究生活という悪条件の下で福音書の種々のシリア語テクストの収集と研究に取り組まねばならなかったためと想像される。ここで批判的に認識しておくべきことは，解釈上注目に値する上記の異読が，ネストレ版の異読欄にも反映されていないという重大な事実である。こういう処置は，少なくとも「科学的」とは言えず，膨大な量のテクスト群の範囲を限定し，ひいては解釈の幅を狭め

る恐れがあろう。

シリア語テクスト資料を取捨選択するF. C. バーキットの分析方法を自らの研究方法と比較して，A. ヴェーブスは，自らが採用する研究方法を「純学問的」と称する。A. ヴェーブスによれば，F. C. バーキットの手法は，建築家が自らの建築デザインに適合するように建築資材を取捨選択して，それらに手を加えて建物を完成させていく作業と似ており，「科学的–芸術的」である。F. C. バーキットは，Pと『ディアテッサローン』の優位という前提を他のそれら以前のシリア語テクストの評価に反映させようとしている点で演繹的である。他方，A. ヴェーブスは，分析対象としてのテクスト資料を取捨選択せず，利用可能なすべてのテクスト資料を並べて検討する。どのようなデザインが出来上がるかを問わないという点で帰納的である[90]。

村岡論文は，わが道を行くA. ヴェーブスの研究に一定の評価を与えながらも，その妥当性の判断に関しては若干慎重である[91]。これは学問的方法論に関係する問題であるが，決着がつくような性質の問題であるとも思えない。

6. 「群衆」の原像

当該箇所の「群衆」は，米国聖書協会『ヘブライ語訳新約聖書』では“המון”（hāmōn）を当てている（マコ二･13，三･7他も同様）[92]。この「ハーモーン」は「（民の）ざわめき」（詩六十五･8），「（大雨の）音」（列上十八･41），「（歌の）声」（エゼ二十六・13），「（町の）騒ぎ」（ヨブ三十九・7），「群衆」（サム上十四・16），「（家畜の）群れ」（エレ四十九・32），「（酒は）バカ騒ぎする」（箴二十・1），「富」（イザ六十・5）などを意味する。その動詞形「ハーマー」は，「（熊のように）吠える」，「ハトがクークー鳴く（=「悲しむ」）」（イザ五十九・11），「（魂が）思い乱れる」（詩四十二・6. 12）などの用例が示しているように，「騒々しさ」を含意し，「静けさ」とは対極にある語である[93]。

職人，奴隷，都市部のプロレタリアート，貧農などに関する記述は今日的

な社会史的関心を呼び起こすが，古代資料は，自然災害や社会的騒乱などとの関連でこれらの人びとの存在をたまたま話題にすることはあっても等閑視する場合が多い[94]。こうした資料上の制限にもかかわらず，新約聖書の四福音書では「群衆」の存在は繰り返し言及されており，その語の本来の意味は「民草」のイメージに近いと思われる。したがって，「福音書」の「福音」は「民草の福音」と称していいかもしれない。そういう点に関して言えば，「福音書」は古代文献としては特筆すべき文学であろう。

それゆえに，書き記された「群衆」をいろいろな仕方で特徴づけてみたくなる。マタイ，マルコ，ルカにおける「群衆」の用例を教会論的枠組みの中で個人的倫理と共同体的倫理に類型化する分析[95]もある。また，いろいろな文脈の中における「群衆」像を抽出した説明[96]もよく行われている。しかし，いかなる視点に立とうとしても，フェミニズム神学であれ民衆の神学であれ解放の神学であれ，その神学的記述は福音書著者たちがテクストの中で描写した「群衆」像の再解釈であり，「群衆」本来の騒々しさが後退する。そういう限界はすでに，福音書という文書作成の段階で始まっており，そこには，著者，あるいは，その背後にある共同体の意図が働くことは避けられない。

そういう限界は，原始キリスト教に関する詳細な社会史的研究[97]においてさえ見出される。同研究は，イエスに従った者たちを，その語の本来の意味における「弟子集団」（Jüngerschaft）と「信奉者集団」（Anhängerschaft）の二つに類型化している。人間の集合体を表す接尾辞（-schaft）によるイエスの仲間集団――Jesus' Associates と評してもいい――の類型化もまた，救済史的観点に立つ限り，教会論的枠組みの変形である。われわれは，ここで，救済を求めてイエスのもとへ殺到する群衆も，「十字架にかけろ！」と叫ぶ群衆も，所与の前提として教会的な共同体を構成しているのではなく，元来全体として人間社会を構成していると見なすべきであろう。

後述するように，大きく成長するイメージを持つ民衆は，近代的な意味で

の自己決定権を持たされていないがゆえに当局側に利用され，物事が捏造される。こうして民衆が社会のからくりを補強し，当時のユダヤ社会全体――祭司，律法学者，長老，王侯貴族，代官などはその枠内にある――を支える。その結果，すべてがすべてにおいて，社会上層も下層も，つながっているという構造が出来上がる。そのことを福音書における「群衆」描写からも読み取らねばならない。

ドイツの偉大な聖書学者 M. ディベリウスによれば，福音書における群衆描写では，イエスに出遭った人びとは，個人名を言及されず，声を揃えて驚嘆と賛嘆を表明する役割を果たしている（たとえば，マコ一・27，十・46–52 など）[98]。しかし，その説明は，イエスに恭しく従うという規範的なキリスト教的群衆像であって，実際の騒々しい群衆の姿からはかけ離れている。

「群衆」はテクストとして描かれた段階で，ナマモノとしてのその勢いが弱められると言ってもよい。テクスト自体が書き記されたものである以上，一定の解釈を経ている。その解釈されたテクストの分析は，テクストの再解釈でもある。

一方，訳語を工夫して当該箇所の「オクロス」の含みを引き出した訳例もある。たとえば，『新版エルサレム聖書』英語訳では，“This rabble knows nothing about the Law—they are damned” と記されている[99]。“rabble” は，「無秩序な群衆」，「下層階級」，「乱雑な集まり」などといった意味を含む。『エルサレム聖書』フランス語訳版の “foule”（＝人だかり，雑踏，大衆）[100]，他のフランス語訳の “masse”（＝大衆，群衆）[101]，『新改訂標準訳』（*the New Revised Standard Version*）の “crowd”（＝群衆）[102] などよりも，“rabble” は，イエスのもとに殺到する「群衆」のイメージに近いと思われる。

その点に関して言えば，ヒエロニュムスが四世紀末に完成したカトリック公認聖書ウルガタにおいて採用されている “turba”[103] も「騒々しい」イメージを忠実に反映させている。

さらに，“mēshe”（コプト語訳）[104]，“managei”（ゴート語訳）[105]——ドイツ語の“Menge”に相当——，“Volk”（ドイツ語訳）[106]，“multitude”（アラビア語訳『ディアテッサローン』の英語訳）[107]などの訳語は，個々の名前は不明の多くの 人びとの群れのイメージに適合している。

われわれの関心との関係で言えば，注目すべき訳例は，アルメニア語訳である。そこでは，本箇所に登場する「この群衆（ho oxchlos hūtos）」を「この騒々しい群衆」という意味に解した訳を採用し[108]，決して穏やかではない「群衆」の姿を浮かび上がらせることに成功している。アルメニア語訳のこの読みの起源そのものは特定し難いが，上述のA. ヴェーブスが力説するように[109]，シリア人教会とアルメニアとの深い関係はこういうテクスト問題を検討する上で看過できないであろう。A. ヴェーブスは，エフェソス教会会議議事録を引用し，エデッサにはアルメニア人学校に関する言及があるほどまでに，アルメニア教会に教え込まれたシリア教会の伝承は大きな意味があったとする。シリア人伝道者たちの働きによってアルメニアがシリア人教会の深い霊的影響の下に置かれるようになり，古シリア語訳はシリア人教会の中心地エデッサやメソポタミアから導入されて広まったとA. ヴェーブスは主張する。その場合，アルメニア語訳はギリシア語テクストではなく，古シリア語訳を手本としていることになる。なお，アルメニア語訳の最古の写本は紀元後887年に筆写された四福音書であり[110]，古シリア語訳よりは断然新しい。

上述のエウセビオスの『教会史』VI・四十六・3によれば，アレクサンドリアの監督ディオニュシオス（－紀元後264年頃）は，メルザネスが監督を務めるアルメニアのキリスト者たちに対して悔い改めを主題とする書簡を送っている。このことから，三世紀半ばにはアルメニアにキリスト教が伝播していたことが窺える。アルメニア教会初代大司教グレゴール（－紀元後325年）は，ギリシア語文化やシリア語文化の影響を受けた者たちの協力を得て，キリスト教の基礎を作った結果，アルメニア語の語彙にギリシア語や

シリア語が流入している[111]。そういう複雑な言語状況が上述のアルメニア語訳に関係していると考えられる。

結びに代えて――「民草」との関連で――

本稿で取り上げてきた「取るに足らない」存在としての「群衆」は，イエス時代のパレスチナ社会の下層に位置している。こうした社会下層には，どのようなことが起きようとも――イエスのような存在が登場しようとも――，良い風など吹かないものである。社会に好影響を与える良い風が吹いてきたものとして，すなわち，「福音」として，これを書き記す作業は原始キリスト教の宣教活動の重要部分であっても，生身の「群衆」は書かれる対象であり，近代聖書学においては，手を替え品を替え，同工異曲で論じられる対象であり続ける。こうした営み全体が，キリスト教を何ほどかの有力宗教にとどまらせることに大いに役立つようになっているのである。

「オクロス」が古典ギリシア語文献では，「兵士たち」という語との組み合わせで，「兵士集団」を指す場合もある[112]。彼ら下々の人間は，君主ならざる「民」，わが国の古語で言い換えれば，草のように増え広がる「民草」である[113]。彼らが兵士として駆り出されてもおかしくはない。「十字架に付けろ」と叫んだ群衆の中に，元兵士，現役兵士がいても何ら不思議ではない。権力から遠い所に位置している人々は兵隊要員でもある。

「民衆」――ラテン語では plebes，ギリシア語では plēthos――という語は元来，印欧語研究の知見によれば，「成長」，「充実」などといった概念を含んでいる[114]。people（＝民族）のラテン語形（populus）の原意は「軍隊」である。その動詞形（populari）は「荒廃させる，略奪する，破壊する」を意味し，ドイツ語の動詞 verheeren――Heer は「軍隊」の意――に対応する。「民衆」に相当するドイツ語の Volk は，ドイツ文学者アルブレヒト・シェーネ編『ファウスト』ドイツ語版テクストの注解書において十八世紀の段階で

は依然として「兵隊」という意味を含んでいたと推定されている[115]。わが国の森鴎外訳『ファウスト』（1913 年）の有名な一節（863：Die Völker auf einander schlagen）では，Volk の複数形 Völker が「兵隊」と忠実に訳されている。

「民衆」との関連で言及するに値するのが，ガリアに軍事侵攻したカエサルの『ガリア戦記』の記述（六・13, 1–3）である。そこにおいては，僧侶と騎士という二種類の人間が挙げられているが，民衆（plebes）は「人間」の範疇に入れられていない。民衆は，負債と租税にあえぎ，支配者たちの乱暴によって苦しめられ，ほとんど奴隷状態にあった[116]。

新約聖書の四福音書に登場する「群衆」もこのイメージに近いであろう。「民草」，「群衆」，あるいは「民衆」は，イエスにしずしずと従う恭しき群れではなく，律法を守るという正しさからかけ離れた所に「呪われた者」として放置され，「飢えに苦しみ，涙を涸らし，路傍などで倒れ，抵抗する力もなく」[117]，社会的に何の影響力も持たない見下された人たち（qṭnā/quṭnā）として描かれている。そのような群衆や民衆に関する描写は，彼らと濃密に交流したイエスに関する描写と表裏一体の関係にある。しかし，それは文学的な描写上の表裏一体の関係である。確かに，著者，あるいは，その背景にあると想定される共同体は，イエスに殺到した群衆に共感を抱いたであろう。礼拝の場でそういうイエスを抱きしめる信仰体験をしたであろう。しかし，礼拝に参与できる者たちはいわゆる「群衆」ではない。イエスと群衆との関係が作品化された福音書の記述は，時空を超えて，われわれをイエスと群衆に出遭わせることへと導くが，それと同時に，時空を超えて，イエスとわれわれとの間に距離をも作り出す。

最後に，プロテスタントの牧師の家に生まれた哲学者ニーチェ（1844–1900 年）のイエス像に言及しておきたい。「抵抗に対する無能力」（Die Unfähigkeit zum Widerstand）を具現し，「群衆」の中にのめり込み，「神

の子として各人は各人と対等である」（als Kind Gottes ist Jeder mit Jedem gleich）という熱狂的振る舞いを徹底したイエスを「天才」（Genie）とか「英雄」（Held）と呼ぶのは誤解であり[118]，それとまったく別の言葉――「聖なる白痴」（Das Wort Idiot）の三字か？――で言い表すべきであるとニーチェは主張した[119]。この主張は，「群衆」と共にいるイエスを描いた諸福音書の様々な描写からも十分に頷けよう。また，ニーチェのイエス像と共通するイエスの姿を伝承として粘り強く記憶したヨハ七・49C・S の独特の読みは，信仰的土壌に深く根を張った豊かな文芸的環境から生み出されたと考えられる。ここに，干からびた単なる書き言葉ではなく，生きたレトリックとしての伝承の力が現れていると言えよう。こうした伝承の力により，現代のわれわれは，イエスの原風景へと連れ戻されるのである。

参考文献

聖書本文

Nestle-Aland, *Novum Testamentum Graece*, 28. Revidierte Aufl., Deutsche Bibelgesellschaft, 2012.〔ギリシア語底本〕

G. A. Kiraz, *Comparative Edition of the Syriac Gospels. Aligning the Sinaiticus, Curetonianus, Peshîṭtâ and Ḥarklean Versions. 4 Volumes*, E. J. Brill, 1996.〔シリア語訳底本〕

The New Covenant: Aramaic Peshitta Text with Hebrew Translation, ed. by the Aramaic Scriptures Research Society in Israel, the Bible Society Jerusalem, 2005.〔アラム語訳ペシッタ，ヘブライ語訳ペシッタ〕

『ヘブライ語版新約聖書』（United Bible Societies, printed in Isarael, 1979）。

Syriac Peshitta and Psalms, printed in New York（1886）.〔ペシッタ訳〕

ラビ文献

https://tehillim-online.com/ethics-of-the-fathers/pirkei-avot-in-hebrew#google_vignette.〔『アヴォート』〕

https://www.sefaria.org/Pesachim.49b.2?lang=bi.〔『ペサヒーム』〕

古代語訳聖書

Weber-Gryson, *BIBLIA SACRA VULGATE, Fünfte, verbesserte Auflage*, Deutsche Bibelgesellschaft, 2007.〔ラテン語訳テクスト〕

The Coptic Version of the New Testament in the Northern Dialect: Volume II, Oxford at the Clarendon Press,1898; *The Coptic Version of the New Testament in the Northern Dialect in the southern dialect: Volume III*, Oxford at the Clarendon Press, 1920.〔コプト語訳テクスト〕

Hrs. von W. Streitberg, *Die gotische Bibel*, Heidelberg, 1950.〔ゴート語訳テクスト〕

Saint Éphrem, *Commentaire de l'Évangile concordant: version arménienne*, éditée, [traduite] par Louis Leloir, L. Durbecq, 1953-1954.〔フランス語訳『ディアテッサローン』〕

Ephraem der Syrer, *Kommentar zum Diatessaron 1. Teilbd. und 2. Teilbd.* übersetzt und eingeleitet von Christian Lange, Turnhout: Brepols, 2008.〔ドイツ語訳『ディアテッサローン』〕

Trans. by J. H. Hill, *The earliest life of Christ ever compiled from the four gospels: being the Diatessaron of Tatian*, Edinburgh: T. T. Clark, 1894.〔アラビア語訳『ディアテッサローン』英語訳版〕

邦語訳聖書

『聖書　新共同訳聖書――旧約聖書続編つき』（日本聖書協会，1987 年）

外国語訳聖書

The HarperCollins Study Bible: Fully Revised and Updated New Revised Standard Version Including the Apocryphal/Deuterocanonical Books with Concordance, HarperCollins Publishers, 2006.〔英語訳テクスト〕

Die Bibel: Einheitsübersetzung der Heiligen Schrift: Gesamtausgabe: Psalmen und Neues Testament Ökumenischer Text, 7. Aufl., Katholische Bibelanstalt, 1992.〔ドイツ語訳テクスト〕

TRADUCTION ŒUMÉ DE LA BIBLE, Alliance Biblique Universelle, 1977.〔フランス語訳テクスト〕
https://nocr.net/hbm/french/frefbj/index.php.〔『エルサレム聖書』フランス語訳テクスト〕
The New Jerusalem Bible, Darton, Longman & Todd Ltd., 1985.〔『新版エルサレム聖書』英語訳テクスト〕
Die Bibel: Nach der Übersetzung Martin Luthers Mit Apokryphen, Deutsche Bibelgesellshaft Stuttgart, 1985.〔ルター訳聖書〕
Die Bibel: Nach Martin Luthers Übersetzung. Lutherbibel Revidiert 2017. Jubiläumsausgabe. 500 Jahre Reformation. Mit Sonderseiten zu Martin Luthers Wirken als Reformator und Bibelübersetzer, Deutsche Bibelgesellschaft, 2017.〔ルター生誕五百周年記念聖書〕

辞典・文法書（著者名アルファベット順，以下同様）
H. Balz& G. Schneider, *Exegetical Dictionary of the New Testament*. Volume 2, William B. Publishing Company, 1991.
W. Bauer, *A Greek-English lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature*, ed., by F. W. Frederick, University of Chicago Press, 2000.
Brown–Driver–Briggs, *Hebrew and English Lexicon of the Old Testament*, Clarendon Press: Oxford, 1952.
千種眞一編『ゴート語辞典』大学書林，平成九年。
J. F. Coakley, *Robinson's Paradigms and Exercises in Syriac Grammar*, sixth edition, Oxford University Press, 2013.
William Jennings, *Lexicon to the Syriac New Testament*, Wipf & Stock Publications, 1926.
Comp. by Henry George Liddell and Robert Scott, *An Greek-English Lexicon*: Oxford University Press, 1983.
T. Nöldeke, *Compendious Syriac Grammar*, Wipf & Stock Publications, 2003.
A. Schmoller, *Handkonkordanz zum griechischen Neuen Testament*, 8. Aufl., Deutsche Bibelgesellschaft, 1990.
J. P. Smith, *Compendious Syriac Dictionary*, Wipf & Stock Publications, 1999.

M. Sokoloff, *C. Blocklemann's Lexicon Syriacum*, co-pub. by Eisenbrauns & Gorgias Press, 2009.

注解書

C. K. Barrett, *The Gospel according to St. John: an introduction with commentary and notes on the Greek text*, London: S. P. C. K, 1958.

R. Brown, *The Gospel according to John I-XII/ Introd., translation, and notes*, Garden City, N.Y.: Doubleday, 1966.

R. Bultmann, *Das Evangelium des Johannes*, 20. Aufl., Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1978.

邦語文献

荒井献『荒井献著作集七』岩波書店，2001 年。

浅田次郎『蒼穹の昴 4』講談社文庫，2017 年第二十三刷。

アウグスティヌス著，中沢信夫訳『ヨハネ福音書講解上巻』教文館，1996 年。

勝村弘也「ヘブライ語ラツォーンの概念史―― 死海文書における用例を手がかりとして」『キリスト教論藻』（第 38 号），神戸松蔭女子学院大学学術研究会，2007 年，21–34 頁。

小林稔「ヘゲシッポス」『岩波キリスト教辞典』岩波書店，2002 年，1003 頁。

国松孝二編『独和辞典〔第二版〕コンパクト版』小学館，第八刷，2016 年。

村岡崇光「シリア教会」『オリエント史講座第三巻――渦巻く諸宗教』（前嶋信次，杉勇，護雅夫編），學生社，1982 年，177–199 頁。

武藤慎一著『宗教を再考する　中東を要に，東西へ』（勁草書房，2015 年）。

中田祝夫・和田利政・北原保雄編『古語大辞典　コンパクト版』小学館，1994 年。

日本カトリック典礼委員会編『新しい「ミサの式次第」と「ミサの賛歌」の旋律』カトリック中央協議会発行，2024 年 6 月 28 日第二刷。

大曾根章介，久保田淳編「四季物語」『鴨長明全集』，貴重本刊行会，平成十二年。

関根正雄『エレミヤ書註解（上）』（関根正雄著作集第十四巻），新地書房，第二刷，1983 年。

新免貢「初期キリスト教における弟子像変遷の軌跡」『キリスト教文化研究所研究年報：民族と宗教（第 49 号）』宮城学院女子大学キリスト教文化研究所，2016 年 3 月，

1–68 頁。
田川建三『新約聖書　訳と註　第五巻　ヨハネ福音書』作品社，2013 年。
土岐健治・村岡崇光著『イエスは何語を話したか？　新約時代の言語状況と聖書翻訳についての考察』教文館，2016 年。
上村静「戦間期のユダヤ教（70–132 年）――ユダヤとガリラヤ――」『人間学論究 6』，尚絅学院大学，2024 年，24–47 頁。
和田廣「アルメニア教会」，上掲書（前嶋信次，杉勇，護雅夫編），200–207 頁。
吉田裕『昭和天皇の終戦史』岩波書店，2022 年第三十刷。
吉村忠典「アンビオリクス」『古典古代における伝承と伝記』岩波書店，昭和 50 年，189–218 頁。

外国語文献
Schalom Ben-Chorin, “Judentum und Jesusbild,” in *Neues Lexikon des Judentums*, von H. J. Schoeps, Gütersloher Verlagshaus, 2000, s. 400–402.
Matthew Black, *An Aramaic Approach to the Gospels and Acts*, Oxford University Press, 1967.
F. C. Burkitt, *S. Ephraim's Quotations from the Gospel: Collected and Arranged*, Cambridge at the University Press, 1901.
Church Music Association of America, *KYRIALE*, DESCLÉE & Scocci, 1961.
The Rev. Bernhard Citron, “The Multitude in the Synoptic Gospels,” in *Scottish Journal of Theology* 7（1954）, pp. 408–418.
M. Dibelius, *Die Formgeschichte des Evangeliums*, 3. Aufl., J. C. B. Mohr, 1933.
H. J. W. Drijvers, *The Book of the Laws of Countries: Dialogue on the Fate of Bardaiṣan of Edessa*, Van Gorcum & Comp. N. V., Assen, 1965.
Eusebius of Caesarea. *The Ecclesiastical History, Vol 1–2*, Kirsopp Lake, J. E. L. Oulton, H. J. Lawlor, William Heinemann, Harvard University Press, 1926–1932.〔エウセビオス著，秦剛平訳『教会史 2』山本書店，1987 年〕
J. A. Fitzmyer, “The Languages of the Palestine in the First Century A. D.,” in *CBQ* 32（1970）, pp. 501–531.
――――――――, “The Aramaic language and the Study of the New Testament,” in *JBL* 99/1（1980）, pp. 5–21.

Simon Gathercole, *The Composition of the Gospel of Thomas: Original Languages and Influences*, Cambridge University Press, 2012.

Moshe Greenwerg, "AM HA AREZ," in *the Encyclopaedia Judaica. Vol. 2*, Thomson Gale, 2007.

Wolfgang Hage, *Syriac Christianity in the East*, Lectures given at the St. Ephrem Ecumenical Research Institute, Kottayam in March 1997.

M. Hengel, *Zur urchristlichen Geschichtsschreibung*, Calwer, 1979.〔M. ヘンゲル著，新免貢訳『使徒行伝と原始キリスト教史』教文館，1994 年〕

J. Jeremias, *Neutestamentliche Theologie: Erster Teil: Verkündigung Jesu*, 2. Aufl., Gütersloh: G. Mohn, 1973.〔J. エレミアス著，角田信三郎訳『イエスの宣教』新教出版社，1978 年〕

Francis W. Kelsey, *C. Iulii Caesaris Commentarii rerum gestarum. Caesar's Commentaries: the Gallic war, books I-Iv, with selections from books V-VII and from the civil war*, Boston, New York Allyln and Bacon, 1918.

Hans-Josef Klauck, *Apokryphe Evangelien: Eine Einfühhrung*, Bibelwerk, 2008.

Klaus Koch, „Sühne und Sündenvergebung und die Wende von der exilischen zur nachexilischen Zeit," in *Evangelische Theologie* 26（1966）, s. 217–239.

Julia Kristeva, *Desire in Language: A Semiotic Approach to Literature and Art*, New York: Columbia University Press, 1991.

Agnes Smith Lewis, *The Old Syriac Gospels or Evangelion da-mepharreshe*, Williams & Norgate, London, 1910.

Hans Lietzmann, *An die Korinther I//II*, J. C. B. Mohr, Tübingen, 1969.

J. G. Machen, "History and Faith," in Michael Warner, ed., *American Sermons: The Pilgrims To Martin Luther King, Jr.*, The Library of America, 1999, pp. 742–755.

Ed. by F. G. Martínez & E. J. C. Tigchelaar, *The Dead Sea Scrolls: Study Edition*, Leiden: Brill, 1999.

B. M. Metzger, *The text of the New Testament*, Oxford University Press, 1969.〔B. M. メツガー著，橋本滋男訳『新約聖書本文研究』新教出版社，1983 年〕

————, *A Textual Commentary on the Greek New Testament: A Companion Volume to the United Bible Societies' Greek New Testament*（*3rd edition*）, United

Bible Societies:, New York, 1971, p. 133.
――――――, *The Early Versions of the New Testament. Their Origin, Transmission, and Limitations*, rep., Oxford University Press, 2001.
Friedrich Nietzsche, *Gesammelte Werke: Bd. 17: Der Antichrist; Ecce homo; Gedichte*, Musarion, 1926.〔原佑訳『ニーチェ全集：第十三巻』理想社，1980 年。西尾幹二・生野幸吉訳『偶像の黄昏；遺された著作（1888-89 年）』白水社，1987 年〕
Jürgen Roloff, "Jesus von Nazareth," in *Religion in Geschichte und Gegenwart*, ed. Hans Dieter Betz, 4th ed. (Tübingen: Mohr Siebeck, 2001), vol. 4, col. 463f.
Hrsg. von Albrecht Schöne, *Johann Wolfgang Goethe: Kommentare*, 4. überarbeitete Aufl., Deutscher Klassiker Verlag, 1994.
Otto Schrader, *Die Indogermanen*, Neubearbeitet von Hans Krahe, 1935.〔オトー・シュラーダ著，ハンスクラーエ改訂，風間喜代三訳『インド・ヨーロッパ語族』クロノス社，1982 年第三刷〕
Emil Schürer, *A History of the Jewish People in the Time of Jesus Christ, Volume 2: Division 2*, Hendrickson, 1995.
E. W. Stegemann/W. Stegemann, *Urchristliche Sozialgeschichte. Die Anfänge im Judentum und die Christusgemeinden in der mediterranen Welt. 2., überarbeitete und ergänzte Auflage*, Kohlhammer,1997.
G. Theißen & A. Merz, *The Historical Jesus: A Comprehensive Guide*, from the German *Der historische Jesus: Ein Lehrbuch*, Vandenhoeck & Ruprecht, 1996, Fortress Press,1998.
――――――――――, *Der historische Jesus. Ein Lehrbuch*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprechtm,1996, s. 493-496.
Satoshi Toda, "Reexamining Ephrem the Syrian's Quotations of the Gospels," in *Journal of the Graduate School of Letters*, Hokkaido University, Vol. 12, pp. 1-18, February 2017.
A. Vööbus, *Studies in the Gospel Text in Syriac*, Louvain: L. Durbecq, 1951.

1　本稿は，日本基督教学会 第 72 回学術大会研究発表（関西学院大学，2024 年 9 月 4 日）に修正を加えて執筆されたものである。聖書の文書名は煩雑を避けて『』を付せず，本稿の題を除いて『聖書　新共同訳聖書――旧約聖書続

編つき』（日本聖書協会，1987 年）の略語表記に従う。聖書箇所の章・節は，漢数字・アラビア数字で表記する。聖書外文献資料の表示も同様である。

2 *Aboth* 二・5 のヘブライ語テクストは以下による。*https://tehillim-online.com/ethics-of-the-fathers/pirkei-avot-in-hebrew#google_vignette*. 2024 年 12 月 9 日最終閲覧。

3 R. Bultmann, *Das Evangelium des Johannes*, 20. Aufl., Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1978, s. 234–235; C. K. Barrett, *The Gospel according to St. John: an introduction with commentary and notes on the Greek text*, London: S. P. C. K, 1958, p. 274; R. Brown, *The Gospel according to John I-XII/ Introd., translation, and notes*, Garden City, N.Y.: Doubleday, 1966, pp. 325, 331.

4 R. Brown, *op. cit*., p. 325.

5 *https://www.sefaria.org/Pesachim.49b.2?lang=bi*. 2024 年 12 月 9 日最終閲覧。

6 C. K. Barrett, *op. cit*., p. 274

7 *Die Bibel: Nach der Übersetzung Martin Luthers Mit Apokryphen*, Deutsche Bibelgesellshaft Stuttgart, 1985, s. 30; *Die Bibel: Nach Martin Luthers Übersetzung. Lutherbibel Revidiert 2017. Jubiläumsausgabe. 500 Jahre Reformation. Mit Sonderseiten zu Martin Luthers Wirken als Reformator und Bibelübersetzer*, Deutsche Bibelgesellschaft, 2017, s. 355.

8 上村静「戦間期のユダヤ教（70–132 年）――ユダヤとガリラヤ――」『人間学論究 6』尚絅学院大学，2024 年，24–47 頁。

9 Moshe Greenwerg, “AM HA AREZ,” in *the Encyclopaedia Judaica. Vol. 2*, Thomson Gale, 2007, pp. 66–70; Emil Schürer, *A History of the Jewish People in the Time of Jesus Christ, Volume 2: Division 2*, Hendrickson, 1995, p. 22.

10 Saint *Éphrem, Commentaire de l'Évangile concordant: version arménienne*, éditée, [traduite] par Louis Leloir, L. Durbecq, 1953–1954.

11 Ephraem der Syrer, *Kommentar zum Diatessaron 1. Teilbd. und 2. Teilbd.* übersetzt und eingeleitet von Christian Lange, Turnhout: Brepols, 2008.

12 G. A. Kiraz, *Comparative Edition of the Syriac Gospels. Aligning the Sinaiticus, Curetonianus, Peshiṯtâ and Ḥarklean Versions. Volume Four:*

John, E.J. Brill, 1996, p. 148.

13　田川建三『新約聖書　訳と註　第五巻　ヨハネ福音書』作品社，2013 年，788 頁。

14　S，C，P，H 以外に，ギリシア語法が顕著に見出されるパレスチナ・シリア語訳も存在する。その使用言語は，旧約聖書のタルグムにおいて使用されている西方アラム語に類似するシリア語であると言われている。各シリア語訳写本のスリリングな発見話や作成過程を含む概略については，B. M. メッツガー著，橋本滋男訳『新約聖書本文研究』新教出版社，1983 年，改訂第二版，73–78 頁を参照。さらに詳細な紹介と研究状況は下記を参照。Bruce M. Metzger, *The Early Versions of the New Testament. Their Origin, Transmission, and Limitations*, rep., Oxford University Press, 2001, pp. 3ff.; G. A. Kiraz, *Comparative Edition of the Syriac Gospels, Volume One: Matthew*, pp. xviiff.

15　*The New Covenant: Aramaic Peshitta Text with Hebrew Translation*, ed. by the Aramaic Scriptures Research Society in Israel, the Bible Society Jerusalem, 2005, p. vi.

16　M. Sokoloff, *C. Blocklemann's Lexicon Syriacum*, co-pub. by Eisenbrauns & Gorgias Press, 2009, p. 22. この語の語根は，「律法」を意味する “tōrā” の語根と同じである。J. P. Smith, *Compendious Syriac Dictionary*, Wipf & Stock Publications, 1999, p. 8.

17　M. Sokoloff, *op. cit*., p. 688.

18　Agnes Smith Lewis, *The Old Syriac Gospels or Evangelion da-mepharreshe*, Williams & Norgate, London, 1910, p. 138.

19　*The New Covenant, op. cit*., p. 130. Brown–Driver–Briggs, *Hebrew and English Lexicon of the Old Testament*, Clarendon Press: Oxford, 1952, p. 1107.

20　R. Bultmann, *op. cit*., s. 234, Anm. 3, 4.「呪われている」（eparatoi）は，三人称男性複数形の形容詞である。ブルトマンによれば，これが直説法の節で用いられる場合，セム語的な呪いの言葉や祝福の言葉と同様，命令法的な効力を持つ。また，R. ブラウンは，この「呪い」を，神の戒めを守らない者たちを「呪い」の対象としている詩一一九・21 などと関係づけるが（R. Brown, *op. cit*., p. 325），ファリサイ派が実際に「呪われよ」となじっている

と理解したほうが文脈に適合している。C は，直接話法を導入する小辞（d）をわざわざ用いて，「彼らは呪われている」と生き生きと描写している。

21 R. Brown, *op. cit*., p. 330.

22 J. エレミアス著，角田信三郎訳『イエスの宣教』新教出版社，1978 年，223–224 頁。

23 W. Bauer, *A Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature*, ed., by F. W. Frederick, University of Chicago Press, 2000, p. 45.

24 T. Nöldeke, *Compendious Syriac Grammar*, Wipf & Stock Publications, 2003, §374, p. 309.

25 William Jennings, *Lexicon to the Syriac New Testament*, Wipf & Stock Publications, 1926, p. 164.

26 William Jennings, *op. cit*., p. 103; M. Sokoloff, *op. cit*., p. 638; J. P. Smith, *op. cit*., p. 219.

27 Agnes Smith Lewis, *loc. cit*.

28 M. Sokoloff, *op. cit*., p. 1327. 同語は「平信徒」とか「俗人」なども意味する。J. P. Smith, *op. cit*., p. 493.

29 M. Sokoloff, *op. cit*., pp. 1353-1354; J. P. Smith, *op. cit*., p. 501.

30 M. Sokoloff, *loc. cit*.

31 Brown–Driver–Briggs, *op. cit*., pp. 881–882.

32 本稿 15 頁以下参照。

33 「アッバ」（マコ十四・36），「ゲヘナ」（マルコ九・43 他），「タリタ，クム」（マコ五・41），「ケファ」（ヨハ一・43）他多数。J. エレミアス，上掲書，11 頁。新約聖書のギリシア語本文にもアラム語法が認められる。元の言葉のまま保持されたエルサレム原始教団の典礼式文に由来すると思われる「マラナ・タ」（第 1 コリ十六・22）――「われわれの主は来た」または「われわれの主よ，来たりませ」――は，その有名な一例である。Hans Lietzmann, *An die Korinther I//II*, J. C. B. Mohr, Tübingen, 1969, s. 90.

34 Bruce M. Metzger, *op.cit*., pp. 83ff.

35 Nestle-Aland, *Novum Testamentum Graece*, 28. Revidierte Aufl., Deutsche Bibelgesellschaft, 2012, s. 317. なお，「弟子ユダ」に関する文献学的理解に

基づく考察に関しては，拙稿を参照。新免貢「初期キリスト教における弟子像変遷の軌跡」『キリスト教文化研究所研究年報：民族と宗教（第 49 号)』宮城学院女子大学キリスト教文化研究所，2016 年 3 月，1–68 頁。さらに詳細な分析は，田川建三，上掲書，486 頁を参照。

36 Eusebius of Caesarea, *The Ecclesiastical History, Vol 1–2*, trans. by Kirsopp Lake & J. E. L. Oulton, Harvard University Press, 1926, p. 376.

37 Hans-Josef Klauck, *Apokryphe Evangelien: Eine Einfühhrung*, Bibelwerk, 2008, s. 62.

38 小林稔は, 筆者と同様, “τοῦ Συριακοῦ” を「シリア語の文書」と解する。小林稔「ヘゲシッポス」『岩波キリスト教辞典』岩波書店, 2002 年, 1003 頁。構文上, “τοῦ Συριακοῦ” の “τοῦ” が “εὐαγγελίου” を指しているとまでは考えにくい。

39 エウセビオス著，秦剛平訳『教会史 2』山本書店，1987 年，55 頁。

40 前掲書，244 頁。

41 ドイツの新約聖書学者 G. タイセンと A. メルツは，“the Syrian Gospel” という訳表現を支持する。G. Theißen & A. Merz, *The Historical Jesus: A Comprehensive Guide*, from the German *Der historische Jesus: Ein Lehrbuch*, Vandenhoeck & Ruprecht, 1996, Fortress Press,1998, p. 52, n. 104.

42 Matthew Black, *An Aramaic Approach to the Gospels and Acts*, Oxford University Press, 1967, pp. 266.

43 B. M. メッツガー，上掲書，75 頁。

44 『荒井献著作集 7』岩波書店，2001 年，15–18 頁。この問題は『トマス福音書』の救済思想とも関係していることについては，著作集に寄せられた大貫隆の批判的「解説」（337–348 頁）を参照。なお，『トマス福音書』のコプト語テクストの言語的特徴を詳細に検討し，それをギリシア語テクストと比較し，ギリシア語起源を強く支持する立場もある。Simon Gathercole, *The Composition of the Gospel of Thomas: Original Languages and Influences*, Cambridge University Press, 2012, pp. 17–125.

45 Wolfgang Hage, *Syriac Christianity in the East*, Lectures given at the St. Ephrem Ecumenical Research Institute, Kottayam in March 1997, p. 2.

46 T. Nöldeke, *op. cit*., pp. xxxif.

47 H. J. W. Drijvers, *The Book of the Laws of Countries: Dialogue on the Fate*

of Bardaiṣan of Edessa, Van Gorcum & Comp. N. V., Assen, 1965, p. 61.

48 イエスの用いたアラム語は，J. A. フィッツミヤーによれば，中期アラム語（紀元前 200 年–紀元後 200 年）に位置づけられる。公用アラム語あるいは帝国アラム語（紀元前 700 年–200 年）が様々な方言に分かれ，それまでにはなかった特徴が見出されると言われるのが中期アラム語である。J. A. Fitzmyer, “The Languages of the Palestine in the First Century A. D.,” in *CBQ* 32（1970）, pp. 501–531. J. A. フィッツミアーは，聖書文学学会（The Society of Biblical Literature）会長就任講演（1979 年 11 月 15 日）――“The Aramaic language and the Study of the New Testament,” in *JBL* 99/1（1980）, pp. 5–21――においても，同じ趣旨の問題を取り上げている。

49 J. F. Coakley, *Robinson's Paradigms and Exercises in Syriac Grammar*, sixth edition, Oxford University Press, 2013, pp. 2f.

50 H. Balz, “ὄχλος,” in ed. by H. Balz & G. Schneider, *Exegetical Dictionary of the New Testament*. Volume 2, William B. Publishing Company, 1991, pp. 553–554.

51 A. Schmoller, *Handkonkordanz zum griechischen Neuen Testament*, 8. Aufl., Deutsche Bibelgesellschaft, 1990, s. 374–375.

52 エフラエム写本（五世紀）やベザ写本（五～六世紀）など多数の写本の読みでは，“ochloi polloi”――「多くの群衆」の意――という読みが採用されている。シナイ写本（四世紀）やバチカン写本（四世紀）などでは，“ochloi” という語はなく，“polloi”（＝多くの者たち）という読み，ウルガタでは，“multi”（＝大勢）という読みが採用されている。Nestle-Aland, *op. cit.*, s. 321.

53 「マタ十二･15S･C」は,「マタイによる福音書十二章 15 節のシナイ写本の読み，キュアトン写本の読み」の略記。以下同様。

54 G. A. Kiraz, *op. cit.*, p. 159.

55 G. A. Kiraz, *op. cit.*, p. 163.

56 G. A. Kiraz, *Comparative Edition of the Syriac Gospels, Volume Two: Mark*, p. 116.

57 G. A. Kiraz, *op. cit.*, p. 127.

58 G. A. Kiraz, *op. cit.*, pp. 165, 176.

59 G. A. Kiraz, *op. cit.*, p. 170.

60 G. A. Kiraz, *op. cit.*, p. 220. S・P は「大勢の群衆」と読む。

61 G. A. Kiraz, *op. cit.*, pp. 236–237.

62 G. A. Kiraz, *Comparative Edition of the Syriac Gospels, Volume Three: Luke*, p. 87.

63 G. A. Kiraz, *op. cit.*, p. 281.

64 G. A. Kiraz, *Comparative Edition of the Syriac Gospels, Volume Four: John*, p. 132.

65 G. A. Kiraz, *op. cit.*, p. 238.

66 Bruce M. Metzger, *op.cit.*, pp. 80.

67 Nestle-Aland, *loc. cit.*.

68 R. Brown, *loc. cit.*

69 関根正雄『エレミヤ書註解（上)』(関根正雄著作集第十四巻)，新地書房，第二刷，1983 年，120 頁。

70 アウグスティヌス著，中沢信夫訳『ヨハネ福音書講解上巻』教文館，1996 年，472–473 頁。

71 J. G. Machen, “History and Faith,” in Michael Warner, ed., *American Sermons: The Pilgrims To Martin Luther King, Jr.*, The Library of America, 1999, pp. 742–755.

72 イエスと名もなき「群衆」との一体性は，新約聖書に収められている四福音書を紐解けば，誰にでもわかる水準の事柄である。しかし，史的イエスに関してわれわれが知り得ることは限られている。残存する資料から確認可能なイエスの生涯に関する素描は，下記を参照。Jürgen Roloff, “Jesus von Nazareth,” in *Religion in Geschichte und Gegenwart*, ed. Hans Dieter Betz, 4th ed. (Tübingen: Mohr Siebeck, 2001), vol. 4, col. 463f.

さらにここで指摘されねばならないのは，「イエスはメシアではない」とするユダヤ教側のイエス像の記述も，社会下層と自由に交流したとする近代聖書学のイエス像の記述も，細目はともかくも，その主要部分においては大きく異ならないということである。そのことは，ユダヤ教ラビであるシャローム・ベン・コーリンのイエス叙述（Schalom Ben-Chorin, “Judentum und Jesusbild,” in *Neues Lexikon des Judentums*, hrsg. von H. J. Schoeps, Gütersloher Verlag, 2000, s. 400–402）と，ゲルト・タイセンの規範的なイエ

ス像（Gerd Theißen und Annette Merz, *Der historische Jesus. Ein Lehrbuch*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprechtm,1996, s. 493–496）とを比較すれば，明らかである。

73 Klaus Koch, „Sühne und Sündenvergebung und die Wende von der exilischen zur nachexilischen Zeit,“ in *Evangelische Theologie* 26（1966）, s. 223.

74 ここで，「いかなるテクストも別のテクストを吸収して変形したものである」とするフランスの文芸理論家の洞察力ある指摘が思い起される。Julia Kristeva, *Desire in Language: A Semiotic Approach to Literature and Art*, New York: Columbia University Press, 1991, p. 66.

75 このことについては，原始キリスト教史研究の碩学 M. ヘンゲルが「資料欠乏，さもなければ資料不足は，古代世界の広大な各地域に関する我々の知識を損なう」と述べていることは，歴史家に求められる重要な観点である。M. ヘンゲル著，新免貢訳『使徒行伝と原始キリスト教史（*Zur urchristlichen Geschichitsschreibung*）』教文館，1994 年，15 頁。

76 A. Vööbus, *Studies in the Gospel Text in Syriac*, Louvain: L. Durbecq, 1951.

77 Matthew Black, *Aramaic Approach to the Gospels and Acts* はその代表例（注 42）。この研究書の初版は 1946 年であり，その後，クムラン文書解読やネオフィティ・タルグーム版の分析が進み，改訂や修正を重ね，第三版にまで至っている。近年の研究の一例として，J. A. フィッツミアー上掲二論文（注 48）を挙げることができる。

78 具体例は，土岐健治・村岡崇光著『イエスは何語を話したか？　新約時代の言語状況と聖書翻訳についての考察』（教文館，2016 年）に収められている各論考を参照。

79 村岡崇光「シリア教会」『オリエント史講座第三巻――渦巻く諸宗教』（前嶋信次，杉勇，護雅夫編），學生社，1982 年，177–199 頁。

80 T. Nöldeke, *op. cit*., p. xiii.

81 F. C. Burkitt, *S. Ephraim's Quotations from the Gospel: Collected and Arranged*, Cambridge at the University Press, 1901, pp. v–ix, 24–27, 56–58. F. C. バーキットは，エフライムの福音書引用がペシッタではなく，『ディアテッサローン』に由来し，その言葉遣いが古シリア語訳のそれと類似して

いることを指摘している。F. C. バーキット説批判と課題については，Satoshi Toda, “Reexamining Ephrem the Syrian’s Quotations of the Gospels,” in *Journal of the Graduate School of Letters*, Hokkaido University, Vol. 12, pp. 1–18, February 2017 を参照。

82 A. Vööbus, *op. cit.*, p. 155.

83 *KYRIALE*（Church Music Association of America, 2007; originally published by DESCLÉE & Scocci, 1961, p. 29）に収録されている原曲の歌詞では，その文言は，“Gloria in excelsis Deo” と記されている。*https://media.musicasacra.com/pdf/kyriale-solesmes.pdf*. 2024 年 12 月 15 日最終閲覧。

84 日本カトリック典礼委員会編『新しい「ミサの式次第」と「ミサの賛歌」の旋律』，カトリック中央協議会発行，2024 年 6 月 28 日第二刷，69 頁。

85 ペシッタ本文は，下記を参照。*Syriac Peshitta and Psalms*, printed in New York（1886）, p. 138. *https://archive.org/details/SyriacPeshitta/page/n11/mode/2up*. 2024 年 12 月 18 日最終閲覧。

86 M. Sokoloff, *op. cit.*, p. 966; J. P. Smith, *op. cit.*, p.359.

87 本批評学上の原則に基づく分析は，下記を参照。B. M. メッツガー，上掲書，258–259 頁。Bruce M. Metzger, *A Textual Commentary on the Greek New Testament: A Companion Volume to the United Bible Societies’ Greek New Testament*（*3rd edition*）, United Bible Societies:, New York, 1971, p. 133.

88 シリア宗教の地下水脈を縦横無尽に掘り起こした武藤慎一著『宗教を再考する　中東を要に，東西へ』（勁草書房，2015 年）を参照。なお，ギリシア語 eudokia に対応するヘブライ語 rāṣōn は, 旧約聖書の随所, 及び, 死海写本の『感謝の歌』（*1QHa* 12,33f.; 19,9）にも見られる。これについては, 勝村弘也氏（旧約聖書学，神戸松蔭女子学院大学名誉教授）と，須藤伊知郎氏（新約聖書学，西南学院大学神学部教授）から貴重なご教示を賜った。クムラン第 1 洞穴から発見された『感謝の歌』のヘブライ語テクストは，*The Dead Sea Scrolls: Study Edition*, ed. by F. G. Martínez & E. J. C. Tigchelaar, Leiden: Brill, 1999, pp. 170–171, 188–189 を参照。さらに, 勝村弘也「ヘブライ語ラツォーンの概念史――死海文書における用例を手がかりとして」『キリスト教論藻』（第 38 号），神戸松蔭女子学院大学学術研究会，2007 年，21–34 頁を参照。

89 William Jennings, *op. cit.*, p. 146.

90 A. ヴェーブスの研究人生と研究姿勢については，『シリア語訳福音書テクスト研究』（注 76）序文（pp. I–IV）と「第一章　序論」（pp. 1–9）参照。

91 村岡論文，上掲書（注 79），188 頁，199 頁注 22。

92 『ヘブライ語版新約聖書』（United Bible Societies, printed in Isarael, 1979, p. 258）。「群衆」を，ペシッタ・アラム語訳テクストは ‘mmā，ペシッタ・ヘブライ語テクストは ‘ām と訳している。*The New Covenant, op. cit.*, p. 130.

93 The Brown-Driver-Briggs, *op. cit*, p. 242a.

94 M. Hengel, *op. cit.*, s. 20. 邦訳，32 頁。

95 The Rev. Bernhard Citron, “The Multitude in the Synoptic Gospels,” in *Scottish Journal of Theology* 7（1954）, pp. 408–418.

96 『新約聖書釈義辞典』における “ochlos” の説明（注 50）。

97 E. W. Stegemann/W. Stegemann, *Urchristliche Sozialgeschichte. Die Anfänge im Judentum und die Christusgemeinden in der mediterranen Welt*. 2., überarbeitete und ergänzte Auflage, Kohlhammer, 1997, s.176–177.

98 M. Dibelius, *Die Formgeschichte des Evangeliums*, 3. Aufl., J. C. B. Mohr, 1933, s. 50f., 54f, 64.

99 *The New Jerusalem Bible*, Darton, Longman & Todd Ltd., 1985, p. 1761.

100 テクストは，*https://nocr.net/hbm/french/frefbj/index.php* を参照。2024 年 6 月 4 日最終閲覧。

101 *TRADUCTION ŒUMÉ DE LA BIBLE*, Alliance Biblique Universelle, 1977, p. 1489.

102 *The HarperCollins Study Bible: Fully Revised and Updated New Revised Standard Version Including the Apocryphal/Deuterocanonical Books with Concordance*, HarperCollins Publishers, 2006, p. 2028.

103 Weber-Gryson, *BIBLIA SACRA VULGATE, Fünfte, verbesserte Auflage*, Deutsche Bibelgesellschaft, 2007, p. 1672.

104 *The Coptic Version of the New Testament in the Northern Dialect: Volume II*, Oxford at the Clarendon Press,1898, p. 420; *The Coptic Version of the New Testament in the Northern Dialect in the southern dialect: Volume III*, Oxford at the Clarendon Press, 1920, p. 126.

105 Hrs. von W. Streitberg, *Die gotische Bibel*, Heidelberg, 1950, s. 41.

“managei” は，新約聖書の福音書では，“ochlos” だけではなく，“plēthos”（「大勢」，ルカ二・13 など）や “laos”（＝「民」，マタ二十七・1 など）にも対応している。千種眞一編『ゴート語辞典』大学書林，平成九年，354 頁。三世紀半ばには，ゴート人の侵入後，キリスト教が小アジアに伝わっていた。ゴート語訳への聖書翻訳を成し遂げたのは，「ゴート人の使徒」のあだ名に値するウルフィラ（紀元後 311 年頃-381 または 382 年？）である。カッパドキア人の母親とゴート人の父親の間に生まれたウルフィラは，三十代初めに司教職に任じられ，ゴート語アルファベット――主としてギリシア語アルファベットとラテン語アルファベットから構成され，古代ゲルマン文字を一部含む――を考案したと言われている。「ウルフィラ」（Ulfilas）という典型的にゴート人の名前は，「狼」を意味する “wulf” の縮小形，よって「小さな狼」の意。Bruce M. Metzger, *op. cit.*, p. 376.

106 *Die Bibel: Einheitsübersetzung der Heiligen Schrift: Gesamtausgabe: Psalmen und Neues Testament Ökumenischer Text*, 7. Aufl., Katholische Bibelanstalt, 1992.

107 Trans. by J. H. Hill, *The earliest life of Christ ever compiled from the four gospels: being the Diatessaron of Tatian*, Edinburgh: T. T. Clark, 1894, p. 183.

108 Bruce M. Metzger, *op. cit.*, p. 162.

109 A. Vööbus, *op. cit.*, pp. 144-151.

110 Bruce M. Metzger, *op. cit.*, p. 158f.

111 Bruce M. Metzger, *op. cit.*, p. 153f. インド・ヨーロッパ語族に属するアルメニア人の先祖アリミニア族，アルメニアの地理的特色，教会の歴史などについては，和田廣「アルメニア教会」（前嶋信次，杉勇，護雅夫編，上掲書，200-207 頁）を参照。

112 Comp. by Henry George Liddell and Robert Scott, *An Greek-English Lexicon*: Oxford University Press, 1983, p. 1281.

113 中田祝夫・和田利政・北原保雄編『古語大辞典　コンパクト版』小学館，1994 年，1026 頁。鴨長明伝『四季物語』には，「民くさの疫」という言い方が見出される。「四季物語」『鴨長明全集』（大曾根章介，久保田淳編），貴重本刊行会，平成十二年，469 頁。『独和辞典〔第二版〕コンパクト版』（国松孝二編，小学館，第八刷，2016 年，2577 頁）が “Volk” の語義の一つとして「民草」

という古語を当てているのは興味深い。ついでながら，例の玉音放送（1945 年 8 月 15 日正午）と内閣告諭に続くアナウンサーの解説――「大御心に副い奉る事もなし得ず，自ら戈を納むるの止むなきに至らしめた民草を御叱りもあらせられず…」――において「民草」という語が使用されており,「民草」の社会的位置づけがそこから垣間見える。吉田裕『昭和天皇の終戦史』岩波書店，2022 年第三十刷，32–33 頁。

114　オトー・シュラーダ著，ハンスクラーエ改訂，風間喜代三訳『インド・ヨーロッパ語族』クロノス社，1982 年第三刷，117–118 頁。

115　Hrsg. von Albrecht Schöne, *Johann Wolfgang Goethe: Kommentare*, 4. überarbeitete Aufl., Deutscher Klassiker Verlag, 1994, s. 232.

116　吉村忠典「アンビオリクス」『古典古代における伝承と伝記』岩波書店，昭和 50 年，190 頁。ラテン語テクストは下記を参照。Francis W. Kelsey, *C. Iulii Caesaris Commentarii rerum gestarum. Caesar's Commentaries: the Gallic war, books I-Iv, with selections from books V-VII and from the civil war*, Boston, New York Allyln and Bacon, 1918, p. 343.

117　浅田次郎の「民衆」観。『蒼穹の昴 4』講談社文庫, 2017 年第二十三刷, 351 頁。

118　Friedrich Nietzsche, *Gesammelte Werke: Bd. 17: Der Antichrist; Ecce homo; Gedichte*, Musarion, 1926, s. 203–204.

119　シュレヒタ版による。この三字は伏字にされていたと言われている。原佑訳『ニーチェ全集 : 第十三巻』理想社, 1980 年, 443 頁。西尾幹二・生野幸吉訳『偶像の黄昏；遺された著作（1888–89 年)』白水社，1987 年，510 頁。